
ファ우드復活前のある出来事

ユーリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファウード復活前のある出来事

【Nコード】

N5070A

【作者名】

ユーリ

【あらすじ】

ファウードを復活させ、魔界の王になる事を夢見るリオウ。しかし、彼には少し悩みがあつて・・・

（前書き）

このお話は、ファウード復活の前の日、『そういえば、リオウ達の食事って誰が作ってたんだろ?』と思って書いたものです。楽しみながらお読みください。

オレはリオウ。

代々ファウードを守り続けてきた一族の末裔だ。

オレは、重大な任務を背負っている。

それは、ファウードを復活させる事だった。

それよりも今、オレには悩みがあった。

もちろん、ファウード復活の事ではない。

ファウード復活に必要な力は集まった。

中には一族に代々伝わる呪術を使い、オレの命を危険にさらしてまで集めた者もいた。

途中でトラブルも起きたが、何とか残り半日となった。

オレの悩みは、別の事だった。

事の発端は、オレの補佐役のザルチムが、昼食後に言った言葉がきっかけだった。

ザルチム

「なあ、リオウ。オマエ、料理作れるか？」

リオウ

「ん？」

ザルチムの質問は、案外簡単なモノだった。

リオウ

「料理？一応作れるが・・・なんでだ？」

ザルチムによると、このファ우드内には料理を作れる者が少ないとの事だった。

もちろん、作れる者は1人いた。

チェリツシュだ。

彼女は女の子という事もあってか、今までずっと料理を担当してくれている。

彼女の作る料理は、とてもおいしかったのだ。

オレは、彼女にテッドという恋人がいると知って、テッドがうらやましいと思っていた。

だが、ザルチムは、ずっとチェリツシュの料理ばかり食べているので、いい加減飽きてしまったらしかった。

そんな事をもし彼女の前で言いでもしたら、彼女の最大呪文が飛んで来かねない。

リオウ

「オマエな・・・そんな事を言ったら、チェリッシュのディオガ・コファルドンが飛んで来かねないぞ・・・」

ザルチム

「ハハハ・・・でもしょうがないだろ。飽きちまったんだから。オレも料理ができるけど、オマエも誰か探してくれよ。」

ザルチムの言い分ももっともだ。

そんなワケで、オレは料理ができる者を探そうと、各部屋を回ってみる事にした。

まずオレが訪れたのは、ウォンレイの部屋だった。

リオウ

「ウォンレイ、入るぞ・・・」

オレはドアを開けようとしたが、その瞬間にやめた。

ウォンレイはパートナーのリエンとラブラブで、ずっと彼女の面倒を見ている。

そんな彼に、料理を作れるかなどと頼めるワケがない。

リオウ

「他のヤツに聞こう・・・」

オレはウォンレイの部屋をあとにし、ロデュウの部屋に向かった。

リオウ

「ロデュウ、いるか？リオウだ。」

オレはドアをノックした。

ロデュウ

「リオウか？いるぞ。」

オレはドアを開け、部屋に入った。

リオウ

「ゲッ・・・」

部屋の中では、ロデュウのパートナー、チータがベッドでスヤスヤと寝ていた。

寝ていても仮面を外していないので少し怖いが、どこか寝顔はカワイかった。

リオウ

「チータ・・・寝てるのか・・・」

ロデュウ

「ああ・・・起こさないようにしてくれよ。で、オレに何の用だ？」

リオウ

「実は、料理が作れるかって事なんだが・・・」

ロデュウ

「料理か？チータに教わったから、至少くらいなら作れるぞ。」

リオウ

「そうか。それじゃ、夕食の時は頼むよ。」

ロデュウ

「料理つて、確かチェリツシュがずっと作ってたんじゃないか？」

リオウ

「そうなんだが、ザルチムが飽きてしまっただけ・・・」

ロデュウ

「なんだ、そりゃ・・・」

ロデュウのオーケーをもらったオレは、次の部屋に向かった。

キース

「料理か？」

オレが次に訪れたのは、キースの部屋だった。

キース

「リオウ、この私を誰だと思っている？ベルンに会うまでは、日本料理店でバイトしてた身だぞ。」

リオウ

「え、そうなの？」

知らなかった。

キースがそんなバイトをしていたとは。

オレは少しうれしくなり、次の部屋に向かった。

リオウ

「ファンゴ、いるか？・・・って、え!？」

オレはファンゴの部屋をノックしようとして、ビクッとなった。

部屋のドアには、『昼寝中。起こすヤツは容赦なく焼く。ファンゴ』と書かれた札がかかっていた。

リオウ

「・・・」

オレは背筋が寒くなった。

『^{フレイム}炎のファンゴ』の名で知られるファンゴの火力は、相当なモノだった。

そんな火力で焼かれたら、たまらない。

リオウ

「ファンゴが起きないうちに逃げよ・・・」

オレはそそくさと、ファンゴの部屋の前から逃げ出した。

ギャロン

「要するに、私に料理を作ってほしいという事だな？」

オレは次に、ギャロンの部屋を訪れていた。

ギャロン

「任せろ、リオウ。紳士たる者、料理の1つくらいできねば男がすたるわ！」

リオウ

「(そういうモンなのか・・・?)」

ギャロンの言葉に疑問を感じつつ、オレは次の部屋に向かった。

次に訪れたのは、ジエデュンの部屋だった。

ジエデュン

「料理？できるぜ。」

そう言いながら、ジエデュンはヘビをムシャムシャ食べている。

リオウ

「(共食いだろ、それ・・・)」

ジエデュンはヘビのような姿をしているヤツだったので、ヘビを食べているのはまさしく共食いとしかいえなかった。

ジエデュン

「といっても、ワニ料理しか作った事ないけどな・・・」

リオウ

「そうか。」

ないよりはマシだ。

オレはそう思い、ジエデュンの部屋を出た。

リオウ

「さて、次は誰に頼むか・・・」

チエリツシュ

「何を頼むの？」

リオウ

「うわぁ!？」

オレは背後から急に声をかけられたので、思わずこけてしまった。

リオウ

「チェ、チェリツシュ・・・」

チェリツシュ

「リオウ、何を頼むの？」

リオウ

「イヤ、それは・・・」

チェリツシュ

「まさか、料理の事じゃないでしょうね・・・」

リオウ

「ギクッ!!」

チェリツシュ

「どうして黙ってるの？何かしゃべってよ。」

リオウ

「イ、イヤ、オマエの料理が飽きたとかそんなんじゃないかな・・・」

チェリツシュ

「飽きた・・・？」

リオウ

「し、しまった!!」

チェリツシュ

「誰・・・？それを言ったのは・・・」

リオウ

「ザルチムです・・・」

チェリツシュ

「リオウ・・・一緒に来なさい。」

リオウ

「はい・・・」

オレは、チェリツシュに引きずっていかれた・・・

ドッガアアアアン！！！！

ザルチム

「うわあああ！！」

ザルチムの部屋のドアが吹っ飛び、チェリツシュが前に立っていた。

チェリツシュ

「ザ・ル・チ・ム・君？」

ザルチム

「ゲッ・・・ヤバい・・・」

リオウ

「ザルチム・・・スマン・・・」

チェリツシュ

「2人とも、お仕置きの時間ね。」

リオウ・ザルチム

「ひ・・・ひえっ！！！」

オレとザルチムは、呪文なしのチェリツシュにボッコボコにされた・
・

そして、夕食の時間・・・

ウォンレイ・ロデュウ・キース・ファンゴ・ギャロン・ジエデュン・
リーヤ

「ど、どうしたんだリオウ、ザルチム・・・？」

ロデュウ達が啞然とするのもムリはない。

リオウとザルチムは、ボロボロだったからだ。

リオウ

「あ・・・あれ・・・」

リオウが指さした方向に、ロデュウ達は向いて、やっと理由がわかった。

ウォンレイ・ロデュウ・キース・ファンゴ・ギャロン・ジエデューン・リーヤ

「な、なるほどね・・・」

チェリツシュ

「ルンルンルンルン」

そこには、楽しそうに料理を作るチェリツシュの姿があった。

ロデュウ達は、ボロボロのリオウとザルチムの姿を見て、確信した。

もし、自分達がチェリツシュの悪口を言おうものなら、リオウとザルチムの二の舞どころか、地獄絵図になるだろうと・・・

そう考えた瞬間、ロデュウ達はふるえていた。

そして結局、夕食は全員が手伝い合って、全員の作った料理が並んだ。

ウォンレイ・ロデュウ・中華料理フルコース

キース・ファンゴ・天ぶらの盛り合わせ（もちろんイモ天つき）

ジェデュン・リーヤ・ワニ料理の盛り合わせ

ギャロン・刺身の盛り合わせ

チエリツシュ・リオウ・ザルチム・フランス料理フルコース（必然的にリオウとザルチムが手伝った）

早い話が、和食、洋食、中華のごちゃ混ぜである。

リイエ達パートナーと恵達もそろい、楽しい夕食になった。

そして数時間後、日の出と共にファワードは復活する事になる。

しかし、ファワード復活の前にこのような騒ぎがあった事など、ガッシュ達は誰も知らない・・・

（後書き）

お楽しみいただけましたでしょうか。多少わかりにくかったかもしれませんが、その辺は軽く流して笑っていただけたら幸いです。感想もぜひお書きください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5070a/>

ファ우드復活前のある出来事

2010年10月28日14時11分発行